

「在宅みとり」にかかる負担

高齢化に伴って死亡者が急増し、政府は住み慣れた自宅での「みとり」を後押しする。入院から在宅への流れは、医療費を減らす効果があるともされる。自宅で最期を迎えるには、どんな負担が必要なのか。



▼1面参照

在宅医療と入院医療 コストは?

城戸君江さんのケース
在宅医療・介護でかかった費用 計約35万円

2016年1月=亡くなる前月

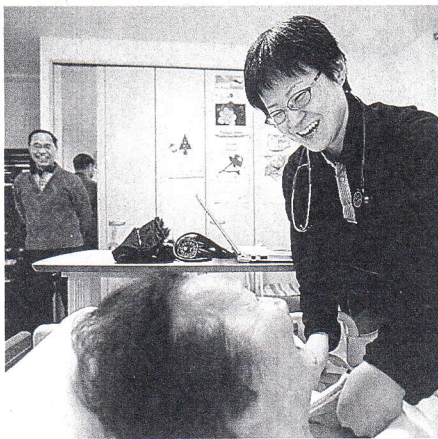
医療保険	13万1660円 (自己負担 8000円)
介護保険	21万5407円 (自己負担 2万1543円)

- ・ほかに、おむつ代約1万円、介護タクシー約5000円など
- ・亡くなった2月の費用(17日間)には、医療保険の往診料(1回7200円)や在宅ターミナルケア加算(6万円)、みとり加算(3万円)などが加わった

入院した場合の1カ月間の一般的な費用

医療療養病棟	30万~50万円程度	入院基本料
緩和ケア病棟	100万~150万円程度	入院料

- ・各種加算は含まず。自己負担は年齢や所得に応じて上限があり、70歳以上だと月1万5千~約8万円。ほかに食費やおむつ代、差額ベッド代などが必要な場合も
- ・日本医師会総合政策研究機構の07年調査では、死亡前1カ月間の入院費用は75歳以上で平均63万円



ベッドに横たわる女性(89)を訪問診療する香木三鈴医師(右)。女性の息子(左奥)は「いづれは自宅のみ」と言い、越田省昌撮影

延命治療より死を迎える支援 「医療費、病院より低い」

2016年2月17日、城戸ユリ子さん(66)の母、君江さん(当時97)は東京都台東区の自宅にいた。午前1時半ごろ、血中酸素の濃度を測る機器の数値が低下。最期のときが近づくと、救急車は呼ばないが、家族で決めていた。

脳出血で10年間寝たきりの母を福島県の実家から呼び寄せたのは15年夏。仕事を辞め母を介護していた弟(63)が脳梗塞で倒れたため、フリーで編集の仕事しながら、在宅医療や介護のサービスをj利用し、弟と

2人で母に付きそった。医師による月2回の定期的な訪問診療で医療費は月約6万7千円。亡くなる前月は人工的に酸素を取り込む機器を導入したこともあり、13万円ほどかかった。毎月医療費の自己負担には所得や年齢に応じて上限があり、君江さんの支払いは8千円。訪問入浴などの介護サービスも約21万5千円分を利用したが、自己負担はその1割だった。

主治医だった「たいとう診療所」の香木三鈴医師に

よると、終末期にある患者に大切なのは「投薬よりケア」。介護職とチームを組み、血圧や皮膚の状態をみて、食事や排泄の状態を確認し、生活全体を支える。香木医師は「積極的な延命治療よりも、自宅で穏やかに療養して死を迎えるための支援が重要。結果として、治療や検査が中心の病院より医療費は一般的に低くなる」と説明する。在宅医療は身体的に通院

が難しくなった場合に利用できる。一方、入院すれば医療費は少なくとも月30万~50万円ほど、手厚いケアを受けられる緩和ケア病棟なら月100万~150万円ほどかかる。君江さんと同じ所得層の場合、自己負担は月1万5千円。費用との差額は医療保険で賄われる。そのため、在宅医療を普及させることで公的な医療費を減らせるという主張は根強い。

「医療とコスト」では今後、介護施設でのみとりや延命治療について取り上げます。総合面で掲載する予定です。

神奈川県厚木市の森の里病院の金城謙太郎医師からは、12、13年に福岡県内のある病院に入院して亡くなった72人と、その病院の医師が11日間以上の在宅医療を行って自宅のみとなった22人について、死亡前30日間の医療費と介護費の合計額を比べた。その結果、在宅で入院の2万2488円で、入院の2万2488円より約17%少なかった。

(森本美紀、高橋美佐子)

時重篤となり、医師に「あと数日もしれない」と告げられた。そこで、妹2人が交代で泊まり込んだ。看護師を夜間に常駐させる選択肢もあつたが、一晩数万円費用がかかると言われ、現実的ではなかった。

在宅のみとりでは、費用は入院より安くなっても、家族による「無償のケア」が補っているともいえる。慶応大学の研究グループは15年、認知症の人の家族らによるケアを費用に換算した研究結果を発表した。1人にかける家族らのケアは週平均で約25時間。民間ヘルパーの費用などから、1人あたり年間約3.82万円と算出した。終末期のケアとは状況が異なるが、家族が担う役割は大きい。

まもなく君江さんは目を閉じ、呼吸が途切れそうになった。ユリさんは、かかりつけの訪問診療医が勤務する診療所に電話で連絡した。約1時間後に医師が到着したとき、呼吸は停止

しており、医師が死亡を確認した。老衰だった。「家族に見守られ、家で静かに逝くのが母の願いでした。私も尊厳ある人生の終わりを見届けることができました」。ユリさんは、当時をそう振り返る。

東京の男性は14年、歯肉がんと診断された。当時54歳。入院中だった翌15年秋、医師からこれ以上の治療は難しいと告げられ、退

院を決めた。男性は一人暮らし。自宅に介護用ベッドや点滴台を運び込み、毎日、看護師やヘルパーらの訪問を受け、壊死した首元の傷

口の手当てもしてもらった。日常生活を支えたのは車で1時間圏内に住む2人の妹で、週数回通ってきた。16年2月ごろ、男性は一

「無償ケア」が支え

日曆の8月15日、月見を兼ね「中秋節」で食べる伝統的な菓子だ。ハスの実などで作ったあんの中に、アヒルの卵の塩漬やクルミが入っているよ。

2856